WASOW HQ 1104 .J17
Jan. 1894 no. 364

明治十八年初刊

女學雜誌

每週土曜日發兌

第三百六十四號

要目

春の花の如き婦人と秋の草の如き婦人　よし治

家政隨筆六ヶ條　石翁
家政は藩政の如し
內君の不經驗は良人の罪
城を預る留守居の如し
女學校の迂遠なる研究
如才なき女學生
老婦人に謹聽せよ

ゆく春の記　露葉
十三頁一篇の文、そも〳〵實事か、はた小說か、何んぞ其の悽惋なる。且や、此文の記者露葉子は世を隱れたる文士なり、初めて此紙上の文壇に現はる。同情の讀者一覽せよ。

ペスタロヂと女性　鷗村

廢娼善後策の問答　交詢

明治二十七年一月廿七日發兌

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

第三百六十四號目録

社說

春の花の如き婦人、秋の草の如き婦人

家政

家政隨筆(六則)

家政は藩政の如し

内君の不經驗は良人の罪

城を預かる留守居の如し

女學校の迂遠なる研究

如才なき女子大學生

老婦人に謹聽せよ

文藝

同訓異義

アハレム○アマチシ○アザムク○アヤマル○

アフ○アラハル○アタル○アツマル○アヤ○

アヲシ○アカシ○アマシ○アバク○アヤシ○

アヽ○

史傳

ペスタロヂと女性(其二)

小說

ゆく春の記(露柴)

(十三頁新小說讀切)

交詢

廢娼善後策につきての問(阿部つる)

右答

時報

◎女子徘業學校○山梨の女子敎育○婦人の龜鑑○住吉村の婚禮風俗○忌むべき流行

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治二十七年一月廿七日發兌

第三百六十四號

社說

陳言。

編者手腕に腫物を生じ執筆することかたし。作辭例の如くならず、編輯また意の如くならぬは、此のゆえなり。讀む人、これを恕し玉へ。

春花の如き婦人、秋草の如き婦人。

晴雨は、天の雲にあらはれ、衷情の喜憂は、人の面に出づ。相貌を察て、心のさまを推せんこと難しとせず。路をゆきて、つくづく婦人の顏ばせを見る時、多くは之に二種の別あることを覺りて、感慨するところ切なり。一つは、艶にしてもろき春の花の如く、又の一つは、さびしうして生色なき秋の草に似たり。春の花は、長閑けき風景をわが物として、色をつくして誇る。愁風未だ吹かざれば、安くんぞ秋あることを知らん。小歌をうたふ樹下のたわれ男に、瓣を落し、蜜の甘きに戯むるゝ胡蝶に花唇をしぼむの外、世に零落あることを覺らず。秋の草は、かなしき虫の音をいのちにして、哀れを世の常と觀じ、取次、枯葉をもがれて、瘠せたる細根をより所となす。吁、枯れ果つべき秋草しばらく悲しみを見して、世の情けを動かすの外あらず。遂に、身を倒して春草の爲めに地を肥やすのみ。春花に似たる婦人よ。御身が頼む所ろ、何物ぞ。綾羅、疾苦を撫するに堪へず、長髮、生命を繼ぐべからず。花に似たる顏ばせは、亦た花の如く過ぎゆくべく、露にひとしき人の情けは、亦た露の如く消ゆる時なからんや。そもそも、御身が男子、何ものの上にか愛思を寄せたる。萠え出る草の花の色に眩して、枯れて行く秋の野邊を惜しまざらん人は、はた何の相思を交えて、人世の零落にたえんとすらん。念せよ、花に似たる婦人。いつまでか、其色をしめさんとする。色うつろひて、香り消え、霜落ちて葉衣をもがれんとき、悄然たる

御身が姿は、そも〳〵何ものをか惑すを得ん。夜會の月の宴にみちかけあり、舞踏の樂の音色に高低あり、それ何ものを賴みとして其調をかまえんや。同御の馬車のわだちは長く印しをとゞめ、合乘の人力車のほろは、暫らく情話を包まんとも、淺々しき人の情けはつゞく可らず、たわれたる男子の眞心は失せんこと早し。吁、如此き婦人、何んぞ速やかに警戒して、夙に終世の備えをせざる。

同情の思ひ切なるは、秋の草に似たる哀われの姉妹にてぞある。沈鬱として氣性開けず、兎角もの思わしげにて引立たず。一言を發するに前後に容赦し、一事を成すに八方に氣がねす。光澤を失なひて深く刻みたる顏の面ての線は、世の波の跡方をのこし、綠の黑髮の色さめて且つ、短かきは千すじの長き憂ひによりてなり。親類の交際に性根をつくし、出入のうわさに耳目をかたむく。家族多くして、掛念亦多く、愛子多くして、處世いよ〳〵苦し。つゞれを繕ろふ孤燈のかげは、女學校の窓のあかしの明るかりしを思はせ、朝夕、仕へて尙ほ滿足をたまわらぬ吾良人は、昔しよみし小說中の紳士とは大ひに違へり。嗚呼、かゝる憂苦に思ひをなやます同胞の姉妹よ。感謝して、其身分の責任をうけよ。御身等は、今ま過渡の舟の中にあり、潮の進退の央ばにさほさす。其理想は、將來の婦人が必らず享け得べき現實にして、其痛苦は、過去の姉妹が涙を飮みて默受したる經驗の代言なり。むかし、幾多の無名の英雄がありし、戶內に戰死して、績ほし後世に傳はらず。されど、御身が今ま受くる苦痛と忍耐と將來の望みとによりて、此等かくれたる人を現はして尙ほ餘りあり。御身等は、先輩の功を標して今ま之を示し、また後代の姉妹に先例をうつして、奮發の機を供ふ。試練は、强き人の上にあり、艱難は、すぐれ人に下す天の試驗問題なり。落心することなかれ、逆流の婦女子、其貞節を發揮して、其操ほを守れ。

われ、路をゆきて、此等二種の婦人を見る每に、其一つの爲にうれひて祈り、他の一つの爲めに感歎して謝す。そも〳〵人世の事業なるもの、何處にか眞價値存す。流行の廣ろきは風にしかず、聲音の大ひなるは、雷鳴にすぐるものあらず。されど、小さき眞珠の之よりも優り、微細なる芥子種の生命の亦更に之よりも優たるは何故ぞ。戶內無名の英雄は、英雄中の英雄なり。血を流すとなく屍をさらすとなき戰死は、戰

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

死中の戰死なり。われは、婦女子のひたひの憂ひの線を月桂樹冠のしるしとなし、むれ集ふ三四の幼な兒がさけびを、ホザナの讃美に比へん。われは、心より此種の婦人を敬して、世に時めき玉ふ大政事家先生を反つて小さしとせん。俗界の評判記、多くはあたらず、淺薄の品さだめ、底蘊に徹せんこと覺束なし。彼の此等の評判品定を聞くことすらなく、更に念頭に掛くることすらなき、愼獨守孤の英雄を敬す。而して、之を敬すると共に、かへすぐ〵も淺ましきは、たはれたる女と、うかれたる男子にてある也。

家政

家政隨筆（一）

山下石翁

○家政は藩政のごとし

家政に心をつけし最初は、之を面白しと思ひしときよりなり。さて、之を面白きものと思ひつきしは、其の大切なることをさとりしによる、人々。とかく家政を分もなきことと看做し、左したる學問伎倆識見なくとも、容易すく行はるべきものと思ふによりて誤まりあり。家政は、一つの政事なり。之を執行ふ人には、一種の政治家氣質なかるべからず。もし之を小さき區域内の事なりとして輕んずる人あらば、今の明治政府をのみ政府と心得て、そのかみ各藩々に行はれし最と周密にして信切なりける政事をば、政事と思はぬ族なるべし。藩政は、人情にふかく、德義にあつかりき。家政は、それ藩政のごときか。

○内君の不經驗は良人の罪

内君をして家政に練達せしめんとせば、之に全任することを要す。たとひ暫らくの間は、失策多くあらんとも、之が爲めに經驗し、奮發して、遂には、自から責を負ひ、堅固なる家政の達人とならん。左るを、事々に内君に命令し、一々之を支配し、さながら下女やとひ女に命ずる如き躰裁にして、之に一任することなき時は、内君永久奮發せず、つねに責任を他に歸して、到底經驗を得ることあらず。かゝる内君は、斷えず良

人の指揮をのみ仰ぐによりて、良人は亦斷えず內に顧みることを止めがたし。此に於てか、しば／＼內顧の煩らひをコボして、專はら外に活働しがたきことを憾み、之を以て悉く內君の不明に歸せんとすれども、過ちの過半は良人たるもの〻覺悟なきに由るとこそ言わめ。一家の內君をしてすら責任を感じて大ひに奮發せしむること能わざるに、何如で能く外界の多人を激勵感發せしむることを得んや。下婢にまかせて或る專務に熱心ならしむること能わざる內君は、好き副將にあらず。副將にまかせて或る事務に熱心ならしむること能はざる良人は、良き大將にあらず。

○城を預かる留守居の如し

內君は、城をあづかる留守居の如し。恥かしき所作を見して外征の人に不名譽を歸すべけんや。今の時は、古への時と異なる。金は、銀行にあづけて、何時にても引出すべし、家に貯蓄するの危險はあらず。刀は、ピストルにかへて、即坐に發射すべし、必らずしも劍道の妙手なきことを恐るべからず。たとひ、野中の孤家に住ふとも、心を安んずるの道はあり。大丈夫の覺悟をもつて、堅固に留守をあづかり、外に戰ふ勇將をして、顧みて白旗のひらめくに泣かしむることあるなかれ。

○女學校の迂遠なる研究

學校の政治學の科業が、政治家をつくりがたきことを知らば、女學校の敎育が、必らずしも十分なる家政主婦を出さゞることをあやしむなかれ。左れど、其敎育のかたきを稱なえて、其責を免かるべからず。女生も亦た心して實地に修學する所ろあるべき也。實地の修學とは、必らずしも、自から校婢を使ひ、自から校の賄に任ずるの謂ならず。細かに校婢の働らき方、人となり、相互ひの交わり方などを視察し、又、賄部の出納をきゝ、物のねだんに考がえ、女生朋輩の食でのみ及び品評等に注意するとの類なり。政治學を學ぶ男生が、一校內の政事に研究せず、家政を學ぶ女生が、一校內の經濟に見聞せざる類を、實地に迂遠なる修學法とは申す。

○如才なきは女子大學生

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

亞米利加の女子大學の學生は、交際の心得あり、人に接して甚はだ鄭寧なり。もし如才なく、人をそらさぬ女學生を見れば、アレハ、大學生ならんと評するほどなり。我國の女學生が、學問するほど彌よ迂遠となるとは、趣きを異にす。其元因の一つは、校内に接待方、交際方等の實行なきが爲めならんか。左れば、女學生は、此邊にも覺悟する所ろありて、校内にあるときより、接待、交際等の技術にも、よく心掛けて稽古すべきなり。

○老婦人に謹聽せよ

古老にたづねて人情世故を聞かざる人は、政治學研究の實地の心得なきことを證するが如く、經驗ある老婦人につきて、實地の經濟法を取調べざる女學生に、家政研究の熱心者はあらず。經驗ある人の言葉は、短くして意味長く、輕ろくして實力重し。よく耳を傾むけ、謹聽して其言を記臆し、之を引延し、推し究め、實地に應用し得るほどの長き細かき敎の辭ばとなして、以て中に含める無限の主意をくむべし。

文藝

同訓異義（一）

五回に分載す

『かなの會』も一と時のはやりと消え、『羅馬字會』も、春の夜の夢と破れ、外山ゝ山先生が『漢字を破る』軍も、半途功成らずして空しく引返したる世の樣にては、四角の文字も習ひ置かずんばある可らず。よりて、こゝに同訓異義の敎少しばかりを揭ぐるものは、近頃漢字を使用する躰裁の餘りに亂暴なることを歎きてなり。

ア

アハレム

哀 其事についてあはれみいたむ意の出でくる事

恤 その事を世話に思ふ　如己之身有患

慈 下々をそだて其生を全ふしてやりたしと思ふを

愛 夫に心をつけ暫らくもそばを離さず可愛がる

憐 觸亂のさき之に心をつけあはれをかける事

怜 さとりめぐむ事あはれと訓するは非なり

愍 それに心をつけてふびんに思ふを

矜 ふびんをかけて見そだてる事

アマ子シ

普 すみから隅まで行き渡る事日光の遠き近きを照らす如し

洽 水のむらなく何處までもよくしみわたる事

溥 一事一物より万物の理に至る迄備はらざるとなき

浹 内外なく一面にうるおい通る事

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

汎 根のはなれて此から向ふまでかけわたす事
遍 偏同のこらず一面になる事

アザムク

欺 見せかけとは違ふて手のある事いつはりだます事
詐 人の氣のつかぬ様に間に合せを言ふてのみこます
誑 人をだましはめる事いつはりたぶらかす事
誄 ちようれんを以て口車にのせる事口利口に言ひまわす事
訐 いつはりあざむく事大口をきく事
譸 たぶらかしはめる事夫にかさをかけて言ひだます
蒙 かぶりものをして人に見せぬやうにする氣味

アヤマル

錯 あちらこちらになつてやりちがへ入組む氣味
謬 さうあるべきすぢがはづれて來る事

アフ

逢 向ふより來る人にでくわす事
遭 間をきて其人にめぐりあふ事
合 彼と此と兩方からぐあいよう合ふ事
邂 たまさかにふと出あふ事
見 まみえ相あふ事

アラハル

顯 人の見る所に出す又高位に登て姓名を人に知らるゝ事
効 其しるしの見へて來るやうすを云ふ

周 ぐるりとまはして元の所にとゞかす事
旁 むちや〳〵として其あたりにひつしりとしてある事
誕 やりばなしの大言を吐くきみ
詭 思ひがけもなき所へ持ち出す氣味。イツハルの部參看
謾 慢も同じいつはりを以て出しぬきはづす氣味
詒 それと思ひこます樣に云ひなす紿も同じ
誘 だましさそひ出す事
譎 イツハルの部に出す
瞞 夫と見せかけてとりちがへさす氣味
誤 そのすぢのちがひてゆく事
訛 あやまりたがふ事、その事がかはりて別事になりて來る事
遇 期せずしてふと出合ふ事
値 そのすぢにあたりてゆく事
偶 ふと出合ふ事
會 あつまりあふ事先きで一處に集る事
著 其所についてあらはれ見へる事
露 むき出しにするきみ

見 現も同じ。目前にあらはれてある事

アタル

當 其場所にあたる事
中 矢の向ふのまさにあたる事向ふへ行てあたる事

アツマル

集 鳥の飛び來て一處に集る如し
鍾 あつめうけいれる氣味
纂 糸をくむ事。書などをあつめる事

アヤ

文 もと畫がきあやなせる事。何でもあやあつて見事なる事。
綺 絹のあやの事

アヲシ

青 あほき色
碧 靑きうちにみどりを含んで見せる色

アカシ

赤 あかき色
紅 赤色のこきを云ふ
絳 あかにこき色を含みたるもの
緋 ひぢりめんの如くもゑたつ色

アマシ

甘 苦の反

アバク

發 内に在るものをひらひて出すやうにする事

形 其形のとほりに見ゆる事
充 其所一パイになる事。其ばかりになる事
聚 散亂したるもののより集まつて元の如くなる事
輯 一つによせてをさめる事
紋 織物のあやあつて見事なる織紋ある事
蒼 靑き色の遠く見ゆる事、天の色を云ふ
翠 るりの色
丹 たんの色
赭 くり色
赫 火のあかき色
朱 朱の色
甜 舌あまきを知る事
訐 人の陰私を言ひあばく事

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

アヤシ

奇 数の中になりてあまるを云ふ。物のつれなくて異なる氣味。

珍 俗人の重寶し尊ぶ所のものを云ふ

怪 一通りならぬやうすありて心得がたく思ふ事

異 そのやうすの切れはなれて格別なる事、ちと並とは違ふ事

ア、

吁 物に驚ろいたる時發する聲、其驚には悲もあり喜もあり又うたがひあやしむ事

咨 咨嗟と連用しても義かはるとなし又吁嗟ともつゞく。

噫 悲哀痛哭する聲心につよく不便なりと思ふ事噫嘻ともつゞく。於戯と同じ

悪 深く嗟歎する事、俗にげうてんして肝がつぶれたと云ふきみ、驚き歎息する中に、心中に斷はあるまじと怒を含む意を帯ぶ。

史傳

ペスタロヂと女性

臨村

（其二）

母スザンナは、氣丈の婦人なりき。されど若し忠實なる下婢バベリの身を獻じて主家の寡婦を助くることなかりしならんには、スザンナも其志或は中途にて挫折し、小兒をして生涯迷路に伶俜せしむるに至りしならん。然れども、天の偉人を養ふや、恰も蜜蜂の女王蜂を養ふに等しくして、ペスタロヂーにはたゞ慈母の賢なるものありしのみならず、天は彼に與ふるに古今の稀れなる忠婢を以して、其幼時の生涯に於て後年大教育者たるの氣を吹込みたり。この忠婢の行跡に就きまた之と共に其家庭の狀態につきて、ペスタロヂー自から記するの文あり、左に之を譯述せん、

『予が母は全く己の身を棄て、己の快樂となすべき總ての物を遠ざけて、三人の小兒を教育せんが爲に、盡されけるが、その貴むべき獻身の務は、一人の年若き下婢の補助するところとなりぬ。この下婢は、予が終生記して忘るべからざるの婦人なり、彼女が予の家に來りて奉公せる一二ケ月の間にて、父は其稀なる忠實なる處と非凡に敬虔なる處とに感激せられしが、父は其臨終の期にて、其身の此世を去るに當り、一厘の金錢もなき處ろに殘しゆかんとする家族のものに來らんずる運命を思ひ、悩まれしかば、彼女を呼び寄せて、父は『バベリよ、神の愛と其凡ての惠によりて、我が妻をば忘るゝな。我今死せんには、我妻は如何なる樣になり行くらん。我が小兒等は、他人の手に渡りて苦き生涯を送るならん。御身の助なくば妻は到底小兒等を其

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

手にて養育するヿ能はじ」といはれしかば、爰にペヽリの貴むべき質朴なる心はうたれて、『御身みまかりたまふとも、妾は御身の妻をば見捨てまじ、必要ならば妾は御身の妻の此世を去らるゝ迄も共にすまん』と答へしかば、此言は哀なる予が父を慰め、喜びの光は其目に耀き、幸げに逝かれたり。

ペヽリは其言を守りて、母のみまかられしまで、我家に留りて、母を助け、困難苦痛の狀態にありて、三兒を養育したり。彼女が其忍耐強き獻身の行をなすに當り、彼女の全く教育もなく僅に數ヶ月以前に田舍の村里をたち出て、ユーリッヒに奉公先を求めんとて來りたるものなるを思へば、更に驚くべき手際と優美なる處を顯したり。彼女が忠實なりしと、其態度に威嚴ありたるヿは、其敬神の念と、單純なる信仰との結果なりき。ペヽリは、良心に從ひて、其約束を實踐せんとは、假令時としては甚だ苦しむべきヿなりしも、彼女は決して之を破らんなどゝするヿなかりき。

寡婦なる予の母の地位は、經濟上に尤も注意を要せしが、ペヽリが殆んど力の外なりしことをもなさんとてとりたる困難は、人の信用しがたき計りなり、野菜又は菓物を購ふに當り、彼女は時々一二厘の錢をも節せんとて、二度三度市場に赴きて、農夫の歸路に着かんとして持てる品物を捌き終らんと心苛立てる折を見計らひて、購ふヿありけり。是と同じく、万事万端に經濟を旨としたり、もししからざりしならんには、予が母の纖手は、到底家政上の費用を供給するヿ能はざりしならん。予等小兒が格別理由もなきに何處にか往かんと求むるときあれば、ペヽリはとゞめて、「何故御身等は用もなきにいでゆきて、衣服又履を惡しくせんとせらるゝにや。母上は、御身等の爲に何一ツもなくていまし、又數ヶ月の間一度も外に出でられず、御身等を教育せんとて、僅一厘の錢をも節儉せらるゝなどは、いかばかりのヿか思ひ見られよ」といふヿありき。然れども、己が事、己が予等の爲に盡したるヿ、また斷えず倦まざる其獻身の務につきては、この貴き婦人は、一言をもいひたるヿなかりけり、予が家の經濟は、いかにしても家に昔より、いひつたはれるヿを行ふヿはゆるさず。又施與義捐の金額、新年の贈物は、予等各個の費用とは全く比例をなす

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の外なりけり。かゝる非常の出費は、常に母とバベリとの心を惱ませしも、二人は決してこれを造るとには猶豫せざりき。予が兄妹及予は、共に美麗なる日曜日衣をば有せしが、之を永持させんが爲に、之を着たりし時は、甚だ少なし、家に入るや否や、直に之を脱したり。もし母の客人を受けんとする時は、家の一つの室は、之に適ふやうせらるゝが爲に少しも勞の節せらるゝことなかりけり。

之をよめば彼が幼時の家庭の狀態と忠婢の行跡とは、宛然として目に映じ來るなり。かゝる愛情、獻身、平和、嚴密なる經濟、高尙なる寛容の盈せる空氣を呼吸して、忠信にして己を忘れ、仁愛深くして温和敬虔なる偉人ペスタロヂーは人と成りぬ。彼が幼時の精神を鎔造したる其母や、實に驚くべき婦人なり。然れどもバベリの如きは、亦更に驚くべき、女子なり。人情紙の如き世に、この無學なる一女子は、僅に一二夕月の恩を辱ふしたるが爲、將に死せんとする主人の信用に動かされたるが爲に、其一諾を重んじて、全身を主家に捧げ、一生遂に嫁せざりき。眞に偉大なる女傑に非ずや。其精神功德は唯主家の裡に埋れずして、凝りて大敎育家の精神となり流れて宇内の人心を化しぬ。

（未完）

小說

ゆく春の記

露葉

こは、實事の記文にあらざるか。何んぞ、其の濃やかにして、且つ至り盡せるとの巧みなるや。左れど、此の般の悲劇は、願わくは小說界の事なれかし、もし實際なりとせば讀む人、恨思にたえじとて、さては此の欄内に掲載せしむ。

編者、白す

明日は日曜なり、これより何所へか一夜どまりの旅をなさばいかにと友のいへるに、それもよし、房州か相州かと詮議して、竟に鎌倉より江の島へ行かむときはめつ、今までその心がまへもあらざりしかど、何の支度もいらぬ身のそのまゝ家をいでゝ、友と我と唯二人、新橋停車場に行きしは、明治二十五年四月二十三日の、日もはや西に傾きし時なりき。

發車の時刻を見れば、鎌倉行は六時すぎにして、今いでむとするは橫濱までのなり、一時間も此所に待たむはおもしろか

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

らねば、まづ濱まで行くべしとて、五時すぎの列車に乘りつ、或は海原遠く船の泛ぶ、或は常盤木の中に櫻の花の殘れるなど、映り來る景色をかれこれと評しつゝ、川崎あたり一面に美しく白きに、これは〳〵とばかりこと葉もなしの花など、さる宗匠ならば吟ずべしとてわが友笑へり。

さて横濱に着き街に行けば、夜店の燈火きらめきて、油煙は人の面を染るかと疑はる、されど我等は心いそぎければ、何を見むとにもあらず、ある菓子屋にて少しばかりこともとめつまた停車場に入りて、人々の風俗を評し時計の針をながめなどして、待つこと半時間ばかり、やうやく乘ることを得たりそれよりは闇を縫ふて行くなれば、をり〳〵遠くに見ゆると、近く窓をかすむ〻どの燈火のみして、よきもあしきも景色は見えず、大船より東海道に離れて、程なく鎌倉に着きぬ。

茶店に入れば燈火暗く、客は我等のみなり、此所にしばし憩ひて、さて海に近き宿屋はいづれぞと問へば、傍の下は此所から近うござりますれど支店だけに、狹く汚なければ、長谷の本店の方が手廣くて、海邊にもござりますれば、其方がお氣にかなひませう、もつとも道は少し遠くはござりますが、小田原屋仁左衞門どまをしまして鎌倉一でござりまする、それに若いお客樣にはお目の毒ではござりますれど、都にもあれほどのものはないと、東京のお方さへおほめになる美人が居りまする、是非今晩はそれへおとまりなされませ、しかしなか〳〵かたいもので、ちよつと見にはやう〳〵はたち位でござりますれど、今年は二十五とやら、それで清淨無垢、男さらいとの評判でござりますと、問はぬことまでも白髮の亭主語りぬ、それならば長谷へとまるべし、はなし半分にしても、それほどの美人を拜みたく、海に近きは最好し、その道はと問へば、是から左へおいでになりまして、橋をお渡りになりますれば眞直でござりますゑ、一寸橋まで御案内致させませう、さいはひあちらの提灯がまゐつて居りますれば、これをお持ち下さいましとかひこ、小田原屋と標せし提灯をともし小女に橋までお送りをなせといふ、我等それに隨ひて此所をいで、道の邊の松が枝に颯々と音を聞き、[illegible]たる聲に海の遠からざるを知りつ、頓て橋の所に來れば、小女も我に提灯をわたして、是からは眞直においでなされば長谷になりまする、小田原屋は右側でござりますると教へて、おだいじにと挨拶し

れ去りぬ、かくておぼつかなき火影に闇を照して、今宵はもはや古跡を探ることもかなはじ、明日は何所より見るべきなど語りつゝ、さびしき道をたどり行きしに、唯一軒の家の、池に臨みたる座敷より、なまめかしき女の聲の漏れ來つ、頓て障子に其姿うつれり、かゝる所にもかのあやしき鬼は棲みけるよとわが友慨きぬ、それより道はふたつになれり、前の方は黒くして、いよ／＼山に入るが如し、左を見れば遠く三點の燈火見ゆ、されば其方へ行かむといひしに、眞直に行けといひしなれば、想ふにあれはいさり火ならむ、猶このまゝに進むべしとわが友のいへるに、おぼつかなくも黒きが中に歩めば、頓てまた一軒のくさの屋あり、其所にて問へば、嬉しや道は違ざりき、それより又橋を渡れば、寔にも左側に小田原屋と標されたり。』

店の者へ提灯をわたし、案内につれて、いと長き廊架をまがり／＼て奥座敷に着きぬ、島田には結べどあから顔の女が、火鉢を出し、茶菓を薦め、また浴衣をもてきて、お風呂をといひて去らむとす、そを呼びとめて、これは少しばかりなれどと、鉛筆もて茶料としるせしを與ふれば、只今お受取をといひていでゆきぬ、さて風呂に行かむと懷中せし物など出せしに、濱にてもとめし菓子の猶ふたつみつ、袋の底に殘りしがいでたるぞをかしかりき。

細川君、あの茶屋の白髮頭がいふた、都にもないといふ美人は、今來たのではないか、鎌倉の美人は此位なものでらうと我笑へば、さうでもなからう、いまに現れるかも知れない、何しろ大江君、湯に行かうとわが友いひつ、また案内されて風呂場に入れば、しほ湯がよろしければこちらへといふ、なに此所でよい、色がくろくなると泣く人があると戯れつ。

もうでるのか、早いではないかと我いへば、君のゆつくりして居るのがめづらしいから、僕も變則をやるのさといひつゝ細川はいで行きけり、我は此數日入浴せざりし故氣味わるかりければ、おもひのほかなが湯して、座敷へ歸らむとせしに、途中にてかのあから顔の女が、恐入ましたがお座敷を變へましたれば、どうかこちらへと、先の方へは行かずして、左の方へみちびき、梯ある所にとゞまり仰ぎ見て、お梅さん御案内と呼びて去りぬ、我はそれを陞り行しに、こちらへといはれて、かたへの座敷へ入れば、細川は烟草を喫みながらはしゐみて、明日は降らねばよいがといふ、いやそれは此方からまをす言

業とたへて、我も火鉢の側へ寛坐すれば、女は茶を薦めつゝ、ようこそおいで下さりました、都からは御不自由でござりませうなれど、古跡の多いと魚の鮮らしいのが、此所の名物でござりまするほどに、御ゆるりと御逗留遊ばしませ、と挨拶丁寧にして、唯今御飯を差上ますとて出て行きけり。

大江君、あの白髪頭の言葉も形なしではないかねといはれ、實にと我はこたへて、實に所詐ではなかつた、あのあから顔の女で充分けなして居つたに、おもひきやかゝる美形の出現せむとはさ、君の今夜の湯はあやしいとおもつた、想ふにあの姿を見たのであらうといへば、なにを馬鹿な、君ではあるまいしと、眞面目になりて細川の辯ずるもをかし。

十時の夜食もまた珍らしと、寧濃に名物のおにがら焼を賞翫し、其他の魚類の都より味のよきをよろこびぬ、されど給仕の女の美形ならざりせばかくまでにはあらざりしなるべしとて笑へり。

膳が下れば番頭來りて宿帳を出す、我筆をとりて、二人の宿所姓名年齢をしるし與へつ、それでは年が違うた、あゝ少し若いのであつたといへば、番頭あやしく笑ふて行く、さてこの座敷は、此家の上席と見えて、装飾も前の座敷とは大分の相違なり、床には探幽の雙幅の龍虎を畫きたるを掛け、机硯箱なども美しきを置きたり、額は醉香館の三字を、位高きさる御方の筆を揮はれしにて、二枚折の屏風には、色紙短册を新古打まぜなり、そが中に春雨のはるゝや頓て梅の花にほひそめたる夕日影かな、といへるがありしに、かの美人のお梅と呼ばれしを憶ひいだして、あの女が二十五とはおもへぬ、男ぎらひといふても、その年まで世間の者が、あの美形をゆるすものかと我いへば、しかし深くいひかはした男でもあつて、それが外國へでもいつて居るとか、または、亡人となつて、操をたてるとかいふ仔細があるのかも知れないと細川の言葉、折しも入り來る美形に、お梅さんさうですかといへば、何なんでございますか、だしぬけのお尋ではわかりませむ、それよりはまあお床を展べませうと、取散せしを片づけ、夜具を重げに扱を見て細川が、手つだつてあげやうかといへば、恐入ます、どうぞねがひますといひつゝ、手ばやく展べをはりて、もうおやすみになりまするかと問ふ、明日はやければさうしやうと答ふ、それではと行燈にかへて、おやすみ遊はせと茶盆を持ちて去りぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

見渡せば海原遠く波低くして、かたへの巖頭には一株の老松鬱然たり、その下に美人と漁夫らしき者あり、美人の顔はおぼえあるやうにおもはれたり、寔にも彼は醉香館のお梅なり、漁夫らしきは誰ぞと見れば、我なり、この大江浩藏なり、我はお梅の袖をとらへむとするに、彼はその手を拂ひて、いよ〳〵巖を離れむとす、我またそれを追ふてとらへむすれば、俄に吹きおこる風つよく、洪波來つて松もろともに洗ひ去らむとす、これはいかにと思ふ折しも、足下よりまた湧き出る雲漠々、お梅の姿は見えずなりけり、さればいよ〳〵惘れて、我は我にもあらずなりし時、忽ち空中に笑ふ聲す瞻れば金鱗光を放つて、一龍雲際を騰り行く、その背に立てるはこはいかに、わが覓むる所のお梅なり、お梅は我に見よとばかりに、其手に抱ける小兒を示せり、こは〳〵いかに、愛らしきその小兒は、わが友細川清太郎なりけり、我も倶にと手を擧る折しもあれ、今や水面を離るゝ龍尾に、はたとうたれて、我はたまらず、海底深く沈まむとするに、援けてくれと聲を放てば、愕然として、夢さめたり、見れば燈火の影暗く、波の響、松の籟、わが枕にかよひつゝ。

夢でも見たかと細川の言葉に、何かいふたかと問へば、何か知らねど一聲大きな聲をしたといふ、さうか、難船した所さと笑ひに紛らせしが、浴衣は汗に濡れて氣味わるし、いまだ夜はあけぬにやと、起きて窓を開けば、吹き來る曉の風寒く、一痕の眉月その影やうやく薄し。

まだ早ければ、誰一人起きいでたる様子なし、また床に入りて、烟草喫みつゝ、今日は何所を見む、江の島へもまわらねばならずなど、語り居る中に雀の聲きこゆれば、頓て人の歩む、戸の開く音す、いざとて、起いでつ、濱邊へ行き見ばやと支度する折からまづ、來りしはお梅なり、おはやうござりまする、どちらへといはれ、濱邊へといへば、さやうでござりまするかと先へ立ちて、下駄をそろへ、庭の木戸を開きて、この道を眞直においでになりますれば、四五軒の家がござります、それから左へおいでになりますれば、もう由井が濱でござりますると敎へて、おはやくお歸り遊ばせといふ、その聲をうしろにきゝて、砂多き道をたどり行けば、寔にもあやしく黑みし家あり、それより左へ行けば、次第に波の音近くなりつ、頓てさゞ波よする汀に立、左の方には老松つらなり、右の方には岬

いでたり、遠く沖の方には白帆走り、近くは漁船の漕ぎ行く見ゆ、遐る朝日の光は、よせてはかへす波にかゞやき、藻屑は打あげられて、此所彼所にあり、いでこの景色をながめつゝ、美しき貝を拾はゞやと、おの〳〵砂原をあさりて、友は形おもしろきを、我は色美しきを得たり、さておのが長き影を踏みつゝ、歸り來れば、長谷の街よりのぼる煙の、前の小山の松の梢をかすむるなど、なか〳〵におもむきありけり。

歸り來れば、庭口にお梅待ち居て、いかゞでござりましたといふ、なか〳〵よい景色でした、これは都へのみやげと貝を見すれば、誠によいのがござりましたこと、さだめしお歸りをお待ちになりまする、お美しいお方がおよろこび遊しませうといはれ、我等閉口しぬ、此時二階にてながめ居りしは、年の頃三十三四の紳士風の一人の好男子なりしが、我等を一寸睨みしやうなり、あれは何とお梅に尋ぬれば、あれは三四日逗留して居りまする誠に誠にいやな人でござりまする。

さて手水をつかひをはれば、茶を薦むるお梅、見ればいよ〳〵美しく、茶店の亭主の話せし評判げにもとおもはれぬ、されど何故とは我も知らぬ胸の中に、そゞろおそろしきが如き心地のせられけるぞあやしきや。

朝餉したゝめて後、此所の地圖を購ひ、いざ出立せむといへば、今晩もおとまりでござりませうとお梅が問ふ、いや今夜は東京へ歸らねばならむから、此近所だけを見て、直ぐ江の島へ行く、實は此所にいつまでも居たいなれどと、我いへば、夫は嘘、先程のおみやげがお氣になるのでござりませうと笑ふ、なか〳〵其樣な氣のきいた男ではない、いづれまた近い中に、お梅さんになぶられに來ませうよと細川がいへば、されば屹度お待ちまをします、是非お近い中においでくださいまし、といひて我に對ひ、是非お二人でお近い中に、といふその顏の少しく紅さして眼は美しくかゞやきぬ、我は殊におもひぞいづる、あやしき夢の金鱗の光

この家を立出れば、皆々送るそが中に、お梅は門を出るまで從ひ來り、是非お近い中にを幾度も繰りかへし、堅くお約束までをしました、かならずお待ちまをしまするといふに、かならずと我等も應へて袂を分ちぬ、此時の彼が眼の中に何かあるやうにおぼえき。

まづ長谷寺に詣づべしとて、山門にさしかゝりし時、うしろ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

より下駄の音敷石にたかく、清樣、清樣、お忘れ物が、と走り來りしはお梅なりけり、細川は何かうけとりて、別れぬ、此時もまた繰返して、是非にと言葉を殘しつ。

次第に登り行けば、太き數本の槇など樹ちて堂は觀音山の中ほどに在り美しくはなけれど、いかにも古きものなるべし、此所にて觀れば、長谷の街は足下にあり、大佛や見越嶽を左に見て、右には海原を望むべし、さてこの山を越ゆるに定めつ、道にあらぬを道として、草にすがり、枝にたよりて、すべる駒下駄を踏みしめつゝ、やうやく山の頂に到り此所にしばし憩へば、岸に並びし漁家より、由井が濱邊に網引く在樣我等が、眸中にあつまりぬ、それよりまた枝をくゞり笹をわけて、進み行きしに、忽ち山は盡きて、下に家も道も見ゆれど、此所より降る途なし、何處ぞと地圖を開けば、前なるは成就院にして、その道は七切通の中の、極樂寺坂なるを知れり。右の方を木の間より窺へば、畑なるに安心して、また枝にさがり、竹をまげて、辛くも下につきぬ、さて、坂のつきあたりに、辨慶の何やらと標札たてたる奥に、爛熳たる櫻あるを見て、橋を渡り、その下に行きて、遠き吉野は知らねど、上野隅田にもかゝる樹は得がたしと賞しつゝ、二三輪つきたるを細川が採りしに、花を折つてはいけませぬといふ聲きこえぬ、見れば圃を隔てゝ寺の前に、かあいげのなき十二三の小娘二人立てり、細川は何をいふぞといひながら、それを帽子に挿して、今の山越で大に渇いた、と傍の井戸に行きて、水を汲みしが、それを飲まむとはせず、考へ居る樣子に、何と問へば、水中の一點紅、これ見たまへ、ところで一句浮むだと細川がいふをきけば、葩 を汲みし釣瓶のにほひかな。

かくて進み行けば、陣鐘山も後になりつ、稻村が崎を東にながめて、袖が浦より七里が濱を行く、山つゞきには、幾年の汐風にくろみし老松あれば、一面に生へたる小松もあり、海には帆を張りたるもあれば、さらぬも多し、道行く人は、いづれも江の島までと見ゆ、このほとりに西洋風の屋敷少なからずありて、門の柱には、おの／＼わが邦人の名を標しあれど、あやしやあるじは碧眼赤髯の人の如きに、わが友はそなたを眺めぬ。

さて江の島に着きにけれども、軒を並べし宿屋、貝細工うる

店、賑しく女の呼ぶ小休所など、そゞろにうるさく、出逢ふ人人も俗氣充ちたるにあきれて、鎌倉の方はるかに好しと我いへば、寔にもとわが友うなづきぬ、かくてかの窟のほとりに到りつ、仰げば空際に龍をどる數丈の松、俯せば岩角に玉くだくる幾層の波に、また浮び來る夢の在樣。

瑞雲樓といへるに登りて、遠くは七里が濱によする白波、近くは松の梢にかゝる釣舟をながめて、午餉したゝむる折しもあれ、多くの舟は姿を隱しつ、波あらくなると見るまに、箱根の山よりや現れけん雲の、一面にひろがり、忽て降り出す雨に、海原濛々として、凄まじき響のみぞきこゆなる。

これは困つた、斯うと知つたら此所へは來なかつたものをと細川の言葉、さうさ鎌倉に居ればよかつた、これも昨夜の湯のたゝりだらうと笑ひつ、しかし今となつてはそれもかなはず、仕方が無い、霽れるまで待たうよと我いへば、霽れるまでだが、そのはれるのがおぼつかないてと細川は歎息しぬ。日はやう〳〵黄昏に近づけど雨は遂に霽れず、せむかたなければ此家に宿ることに定めつ、それより碁を圍みなどして、やうやく時を消したれど、それも長くは續かで、さて烟草くゆらしながら、我わが友にいへるは、細川君、こんな事をいふたら、君が何とおもふか知らぬが、あのお梅といふ美人と君とは、昨夜はじめて遇ふたものとは思へぬが、といふをわが友おさへて、いや君とおなじくはじめてさ、といふに我かさねて、はじめての御客樣を呼ぶに淸樣とはいふまい、それにお忘れ物と渡した品は何か意味があるやうに想はれる、しかしこれは僕の邪推かも知らむが、何もこの二人の中にかくすことはなからう、と少し怨ずれば、細川は困りたる樣子にてこれは、僕がわるかつた、兄弟よりも親しくする君にかくす氣ではないが、いはずに居たがわるかつた、實はあの女は六七年ばかり前に遇ふたことがあつて、昨夜風呂からあがつた所へ、あの女が來て、あなたはたしか淸樣と、いはれてそれと知つたばかり、それをいはずに居たのは、君にあやしいなどゝおもはれるがいやさゆゑ、別に仔細のあるではない、しかし君の疑念の解けるやうに、その來歷を語らうか。

憶ひ起せば七年のむかし、我十六の夏七月の末つかた、父上と倶に箱根塔の澤の溫泉に行きぬ、其頃は未だ汽車の通ぜざりければ、神奈川より馬車にゆられて、炎天に塵埃をあび、

坂道に腰を痛めながら、我は初旅におもしろき東海道の景色山に、海に、珍らしからぬはなく、熱砂面をうつもおそれず松に、流に、いづれも暑さを忘れて、あやしげなる茶店に、ゆで玉子うまく、大磯、藤澤、小田原をすぎて、湯本より左へのぼれば、はや塔の澤に着きぬ、わが宿りしは花の湯と呼ばれ、溪流に臨みて立てり、されば夜半に雨ふり來ぬとおどろきて夢さむれば、石に激する水の音なりけり、此所に留ること二十日あまりにして、或は塔が峯に石階を登り、阿育王山の寺門をくゞり、山百合の花の美しきを折り、或は千歳橋を渡り、湯本に下りて、くさ〲の細工物を見つ、さては看月橋に山の端の月を愛しみ、または閑かなるまゝに、河鹿の鳴くを聽きしが、お梅に遇へるは實に此時なりき、彼はよく我等を介抱しぬ、されば父上もお梅は姿の美しきのみかは、心もいやしからず、そなたの姉の今も在らば、年頃ばかりか面ざしまで、あのやうにあるべきにといはれて、しば〲物などたまはりぬ、或時、彼の身の上をきけば、素は西の都に生れて、榮華の中におひたちたりしが、十三になりし年の秋はからずもあしきやまひに、父母この世を逝られ、たよる所は唯一人なる叔父につれられて、この小田原に來りしが、商法の手ちがひに、叔父は身代をみなになし、昨日の富貴をおもひて、今日の貧賤をなげくを見るに堪へかね、叔母のとむるをも聽かで、給金の前借を叔父に與へて、この花の湯に雇はれしは、お梅が十六の夏のことにして、さきよりは、朋輩の口のわるきに、腹だゝしくはあれど、責ることもえならず、客のいやらしき振舞に、憤ふることもあれど、柳にあしらはねばならず、されば、いつはり多き世と觀じて、獨その身を愼み、日毎のつとめに心をいれて、空しくこゝに四年ごし、何たのしみもあらぬ身なりとの事。

細川が斯く語りし時、女來りて、床を展べければ、横になりて、さてそれからはと問へば、それからは久しぶりで昨夜遭ふて、今朝別れしまでの事、もつとも塔の澤から鎌倉へ移つたのは、一昨々年とやら、花の湯が温泉宿を廢めるに就て、丁度口があつて、あの小田原屋へ來たと、昨夜きいたばかり、それに君が疑がふわれの渡した品は、まつたく僕が忘れて來た絹の手巾さ、これでもまだ疑念がはれないかね、といはれければ、わが胸は何となく安からず、それでまづ來歴はわかつたが、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

しかしまだ打わけていはないところがあると想がといへば、細川すこし太き聲にて、君もうたぐり深いね、それはむかしなじみだけに、少しはなつかしく思はないでもないのさ。

ふと目さむれば轆轆たる響、颯々たる音、今も猶凄まじけれど、夢破らるゝ人もなきにや、家の中はいと靜かなり、友はいかにと見れば、これも熟睡せり、我は何とはなしに眠られざれば、まづ頭をあげて、埋火かきおこし、烟草くゆらしつつありしに、ほのぐらき燈火の影に目に入りしは、わが友の枕のそばにて、をり〳〵動く白き物あり、何なるらむと訝りつゝ、手をさしのべて、それをつかめば、いと軟かなり、猶よく看れば、これは是絹の手巾にして、隙間漏る風や動かしたりけむ。

清様、清様、お忘れ物が、と呼ぶお梅の聲、今また耳に聞えしが如く、おもはずも後をむきて、みづから笑はれつ、さて手巾を見れば、細川がきのふまで持ちしものには似たれどもあやしや紅き所あり、それを披けば、隅の方に小さき女文字醜からぬ走りがきは紅筆の跡。

　是非とも近き中に御いで可被下候、いろ〳〵おんはなし申上度候へども、久々にての昨夜の御目もじは夢のやうにて、今朝ほどの御わかれのまことなるが悲しくぞんじあげまゐらせ候

さても此世のあはれなるもの數々の中に、彼お梅もすまひなむ、父の腕には花とわらひ、母の膝には蝶とねむり、うき世のあらき風にあたらで、育られしはむかしにて、いつはり多き世と觀ぜしまでには、いかばかりの辛苦をやなしけむ、あはれ霜雪を凌ぎ來りて、今ぞ咲くなる梅の花一輪、姿美しく、心いやしからずして、文字さへも醜からず綴るに、女の身にして二十五となりし今も猶、うき草のよるべ定らざるは、いかに悲しかるらむ、拙おもひ來りて、そゞろに涙の漏るをおぼえず、手巾に滴りしに驚きて、それを元のやうになしおきつ。

あくれば二十五日の天はれて、餘波は岸を洗ふ音のみ、朝餉をはれば、依き瑞雲楼を立出て、五くさ六くさの貝細工をもとめ、旅装わきより、あやふげなる棧を渡りて、車をやとひ熊澤へむかひつ、途中の景色は、いづれの方も山より山のみ、我は何をおもふともなく心のむすぼれて、ねむるにもあらずさむるにもあらず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

さて藤澤停車場の前の茶店に着けば、ひまなる車夫は腰を屈めて、遊行寺まで御案內いたしませうといひ、見ぐるしき女が籠を提げて、松露を買ふて下されと來る、それを皆ことはりいふて、頓て着きし列車に乘りぬ。

箱根の山々を後になして、走り行く汽車の大船に着きし時、入り來りし一人の男ありしが、わが傍に先より在りし男と知人と見えて、何かさまぐ\の物語りのすえ。さて說き出せしその言葉は。

我は例の通り、かの小田原やに宿りしが、今朝しらぐ\とあけゆく頃、人々のあはてまどふさまに、何事にやとはね起きて、廊架へ出れば、いつもあから顏の女の、蒼くなりて驅け行くにぞ、呼びとめて仔細をたづぬれば、唯大變なりとこたへて、また驅け行く、我もそれに隨ひて、とある座敷に行きぬ、見れば人々あつまりて、のゝしり騷ぎ、中にも小田原屋夫婦は、氣も狂はむばかりに、醫者を、醫者を、と叫ぶ、誰か急病にもやとおもへば、こはいかに、かの美人の噂たかきお梅が、うらみを含みしおも影ものすごく、虚空を握むで息絕えゐたり、やがて醫師の來りて、さまぐ\に手を盡せしが、竟に蘇らず、兎角なす中警官も來りて、それぐ\取しらべて行きぬ、仔細はこの數日逗留せし、年の頃三十三四の客が、かなはぬおもひに堪へかねて、手あらき所業をなしてもと、さるぐつはわませむとせし手の狂ひて、咽を絞めたるなるべしと、その時の探偵はいへり、まことさる事にもやありけむ、あはれ小田原屋夫婦は子なきがゆゑに、やがてお梅をもらひうけて、家をつがせむとおもひしものなりと聞く、その娘ともおもふものゝむざむのありさま、かけかまいなき、我等さへその胸の中さぞやとおもはれて、そゞろ淚を催しけり、さても鎌倉一の名花を散らせしあらしのにくさよ。

俄に騷がしきもの音に、夢のさめたるが如く、見ればかの二人は居らず、其他の人々も、はや立去らむとするに、此所をいづくと考ふれば、汽車は多くの驛をいつのまに過ぎたりけむ、今しも新橋停車場に着きたるなりけり。

我等はいたく疲勞をおぼえければ、直に車をやとひて、停車場をいでつ、頓てわが家にかへり着けば、出迎ひし人々の、我等をあやしげに見送りしが如し、さて書齋に入りて、茶を飲みながら、わが友を見れば、顏の色蒼く、默然として、お

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

もひに沈むに似たり、君、何か藥をのまないか、どうも顔色が大分わるいぜ、さうして少しねる方がいゝよ、今床を展べさせやうといへば、細川は、うるみし眼を靜かにむけて、なにそれにはおよばむ、少し頭痛がするばかりだから、といへるその聲も、常のさはやかなる調子にあらず。

兄様ちよいとゝわが妹の呼ぶに、何ときけば、母様がといふさて母上の前へ行けば、お前どうぞおしかへと氣づかはしげに問はる、いゝえと答へしに、それでも顔の色がよくないよ、ねえお香津といはるれば、妹は、あいらしき顔をうれはしげに、ほんに兄様の靑いことよ、どうか遊ばしたのでせう、ねえ兄様とわが顔を覗きながらいふ、いやどうもしませせむよ、大方汐風に染つたのだらうといへば、あらいやな、それではもう私は江の島へは行きませむよといひしには、おもはずも笑はれけり。

いま御飯をあげますがね、昨日おとなりから頂いた[illegible]があるが、細川さんもあがるだらうね、と母上のいはるゝに、えゝ飲みませうが、今なんだか少し頭痛がするといつて、弱つて居ましたから、御飯はどうですかと對ふれば、それはいけないね、何か藥をあげませう、たしか神藥がありました、今あとから私が持て行きませうと母上いはれぬ、我は書齋へかへらむとすれば、兄様おみやげはといひつゝ、白き細き手にわが手をひかへて、すゞしき目元に見あげし妹、あゝ忘れて居た、お前にあげやうと思つて、貝細工を買つて來たのを、といひながら、此時までも袂にありしを、取出して與ふれば、いと嬉しげに、母様、これ、兄様のおみやげ。

我はわが妹の、美しく、あいらしきに、ほゝゑまれつゝ、歸り來りし書齋の中には、立のぼる烟、あやしき臭、もゆるは何と火鉢を見れば、こはいかに、きのふの朝、細川が、形おもしろしとて拾ひし、由井が濱邊の貝も、色美しとて摘みし、極樂寺の櫻の花も、かの細手巾もろともに、あはれや灰とならむとす。

此時わが友は、傍に我の立てるを知らざるが如く、今しも燃えゆく手巾の隅の、かの紅絲の跡を瞻つゝありしが、それも次第に灰と化る折しもあれ、さと吹き來りし風に煽られ、烟と共に舞ひのぼれば、乍ち閃めく數點の光、つゞきては朦朧と現れ出し彼の美しき姿、あなやとおもふまもなく、あはれ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

煙と消えゆくにぞ、かのあやしき夢を、今また現に見るごとく、我は我を忘れてありし時、俄に響きしは何ぞ是、吁と叫びし聲、撻と倒れし音。

その後、鎌倉より來りし人にきけば、かの犯人は、數日の中に、上方筋にて捕はれしよし、お梅は、仁左衞門が娘としていと懇に佛事を行はれ、數多の人に送られつ、それより墓前に香花絶ゆる時なく、人々の愛しむ聲いよ〳〵高し、また彼の叔父は、家族もろとも小田原屋にひきとられて、今はその日の苦勞もなくなりぬ、これも偏にお梅ゆゑなりと打よろこび、逢ふ人ごとに涙を流して語るとぞ。

昨夜の御目もじは夢のやうにて、今朝ほどの御わかれのまことなるが悲しく、としるせしお梅の紅筆の跡も、うたゝ憶はるゝけふこの頃、わがあいらしき妹が、その友だちと倶に、かの貝細工ならべて遊ぶ無心のわざも、いと堪へがたきおもひしつ、事に紛れて、この數日訪はざりしわが友は、いかにあらむ、たづねばやと、車を走らすれば、頓てその門に着きぬ、それより其室に入りて、わが友を見れば、大江君か、よく尋ねて來てくれたね、久しく遭はむので、淋しくていかむよ、といふ調子もいと沈みたり、我はそゞろに涙ぐまれつ、細川君、この頃はどうだね、この四五日いそがしくて、尋ねることが出來なかつたよといひけるに、細川は何をおもひてや、さうかね、何しろ身躰を大事にしたまへ、とさびしげにいひながら、膝に落せし一滴、我よりいふべき言葉を、先にいはれて、わが胸は無量の感慨に攻められつゝ、しばし默然としてありし時、忽ちから〳〵と笑ふ聲に驚けば、何所を見るともなき眼に、異樣の光を含みし細川が、何を馬鹿な、およばぬ戀だ、體はふたつでも心はひとつさ、なんの貴樣達が、といひてあやしく笑ふ、笑ふかと見れば、また涙を流して、ゆるして、ゆるして、私がわるいわけではなければ、といふかとおもへば眉はりあげて、おのれ惡魔、惡魔の來る所ではないぞよと罵る、さてしばし落つき、手をあはせ、何か目の前に見ゆるが如く、拜むさましてかすかに、何をかいひ、それより其儘俯して、睡りしやうなりしが、また跳起きて瘦たる手を擧げ人を招くが如きさまし、やがてまた倒れ臥して、こたびは熟睡せり、その顔を看れば、さしも美しかりし細川も、色あせて蒼く艶なく光なく、頬骨たかく、眼くぼみて、も

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の凄きまでにあはれなり、嗚呼、わが友は竟に治すべからざるか、猶幾月幾年の後の曉には、また元の細川清太郎となるべきか、實に我は、最も親しき友を、今はこの瘋狂院に葬りしなり、かゝるおもひに我しらず、我はわが手をさしのべて、生ける屍を、ひしと抱きぬ。

啼て血を吐くといひけむ鳥の聲はきかねど、夜ふかく凄然なる雨の音に、かゝげ力もなき燈火の影暗く、これやわが身の上も五月闇、照らす光は今も猶、あやしき夢とお梅の姿。あはれ彼の亡靈を、その墓前に吊はゞやとおもへども、懐舊の情に、新らしき涙を濺ぐもつらく、かつはかの在樣の友をおきて、我一人行かむこともこゝろなきに似たり、さもあらばあれ、かの日の朝、醉香館の門前にて別れし其折、かならずと堅く約せし我等の言葉も、意味なきものとなりつゝ、洗ひしばかりなりとて、結びもはてざりし長き黒髪も、微妙の韻をこめたりし、その美しき面影も、鎌倉山の星月夜、沖に漂ふいさり火の、煙と消え逝きし今は唯、由井が濱邊にて、わが手に拾ひし、色美しきうつせ貝のみぞ記念なりける（をはり）

交詢

○廢娼善後策につきて

年の始の御慶目出度申納候先々御揃ひ御昌榮に御超歳候段逾かに賀したてまつり候就ては御祝いとして女學雜誌御惠送被下御厚情之段千萬難有拜見仕候さて誌上にて承り候へば群馬縣にては妓樓を全く廢し候由さこそありたき事にて當然の事には候へ共小妹此迄人々に尋ね候へば何日も「到底六ヶ敷からん」との力なき返事に毎度歎かわしく獨り吐息つき如何にもしてと存し居候ひし折柄廿七年早々より貴社之御惠品と共にかゝる吉報に遇ひ嬉しさ何にたとへん樣もなく小妹を失望に陥らせんと爲し人々に對しておのづと心ほこりのせらるるもをかしく御座候就ては一の御尋ね有之候其は此上賤しき業を勤め居つゝ彼女等は今後如何相成る事に候や漸く虎口をのかれ候とも間もなくわる者共の手に入り海外にて國の恥をさらし又は其他の事にて此上の有志の御心配をば水の泡と

なす樣の事有之候ては相すまず定めし先哲の方々の御意見にて適當なる方法有之べく候へば次の紙上にてなりとも又は郵便にてなりとも御答被下度又彼縣に手始め致し候へば引續きかゝる美擧は所々に起るべく存候乍去これ迄貧しき女子の親兄弟の爲め我身を捨てしも數々有之候處此道を絕ちし上はかゝる者をば未發にすくふてだて必要かと存候小妹は年頃此義につき種々考へ少々思ひよりたる事も候へば御笑ひ草迄に大略申上候「そは同志の人々相結びて我國の產物ともなるべき程の仕事をば彼等になさしめ勉不勉によりて賃錢を與へ之をもて附屬の骨肉を養はしめ又附屬人にして可なり健全ならば相當の仕事を之にも命じ少々の賃錢を與ふ而して彼女等が手によりて成りたる品を賣拂して彼等の賃錢其他の諸費を拂ふ又或時間を定め讀書算を授け又說敎等を聞かしめて過ちなからしめん事を謀るの法に候」素より經驗少なく候へば此を幸ひに御尋ね致す迄に御座候年若者のをこかましくは候へ共聊か御國の爲め同胞の爲思ふ心の切なるまゝ拙き筆をも文をも省みず御禮旁かくの如くに御座候　かしこ

一月十二日　阿部つる

答へて曰く、妓樓の全廢は尙ほ易く、善後の策は寧ろ難きものにて、御掛念は至極の要點にあたり、感服の外これなく候、そも〳〵廢娼の精神たる、男女間の淸德を維持し、女性が屈辱にあふを救ふに有之候ことゆへ、公娼を禁じ、妓樓を閉店せしむるなどは、たゞ初步の一段落にすぎず、之よりさき尙ほ數多の盡力すべきと可有之、同志の人は一層奮發すべき筈と信じ候。

上毛の有志諸君に於ても、此邊の御心がけあつく、着々準備なされ候事に承り候。

扨て、婦女子をして正路に反らしむる一方としての御趣構、前段記載なされ候一案は、甚はだ結構の事に存じ候。先々、手內職を與ふる類が、最上の策と信じ候。但し其他にも尙ほ多少の方案なきにあらじとも存ぜられ候。遠からず愚存を細記して、本紙上に公けに可致、其節御覽被下度候。こゝにはたゞ一言御答致置候。

因みに申述候、東京婦人矯風會にては、御趣構と相似たる方案を實行し、改心せる婦女子に職業を敎へ、授產の道を備ふるとに着手せられ候。

時報

◎學校、敎育

●女子得業學校　同校は青森縣南津輕郡山形村大字花卷の人千葉稲城氏の設立になる、昨年十二月其筋より許可を得たる由、今其設立願の趣旨書を送り越されたれば左に掲く

私立女子得業學校設立願

富强なる國家の基礎は富强なる家族の集合にあり故に從順なる家族を以て充滿されたる國家は必ずや國にして國光を萬里の外に輝かし國威を四方に振ひ國儲を遠大に伸ぶるを得べしと雖とも家族の繁昌は忠君愛國の義務と實厚慈恰の仁賢さを待て後に望むことへからず何となれば如何に富貴なる家族と雖も狼子野心の為めに破れ淫逸驕痴の爲に亂さるればなり夫の忠厚謹厳なる仁婦の惻怛慈愛なる然に其家族を保けて忠諒の意ならしめ其[illegible]富强[illegible]ならしめんとを望む[illegible]習をなし[illegible]なす所の家族は[illegible]に向く十分の望なきにあらずや[illegible]の[illegible]する所は是れにあらずして彼れにあり而して其家族を組成の偉業は[illegible]夫を助くるの仁婦に依て功をなせらるるにあらずや然りと雖とも此か偉功を成すの女子に於て之れか[illegible]せば[illegible]に思ひ半に過きるものあらん或は夫の[illegible]に屯如なるも之れを[illegible]くるを知らず[illegible]人をして失敗落膽の淵に沈むも之れを助くるを知らず終に[illegible]分散の不幸に陥り[illegible]を助けず或は[illegible]以て[illegible]を汚す[illegible]に之れを[illegible]しきに至ては之を[illegible]するものあり嗚呼斯の如くにして[illegible]家族の[illegible]むべきか[illegible]な期すべきか[illegible]して自失せざるを得ず而して[illegible]女子教育の如何を[illegible]らば更らに[illegible]たるものあり今や教育の[illegible]に[illegible]く及び制度[illegible]す所なしと雖とも全國七百廿万の學[illegible]の[illegible]万[illegible]る教育の女子將さに國家の母たり[illegible]たらんとする[illegible]に女子の教育に至りては之れか四半にも足らざる人[illegible]此の文[illegible]たる明世にして猶且つ然り況んや文化今に及ばざる時世に於てをや文[illegible]の女子[illegible]て[illegible]の新民を養成せしめ此の無[illegible]の女子をして國家の基礎なる家族を構成せしむ果して家族の[illegible]を望むべきか果して國民の[illegible]を期すべきか[illegible]せざるを得ず然れとも近時世の[illegible]教育[illegible]を[illegible]して女子[illegible]を[illegible]するあり以て[illegible]を開くべしと雖とも時運に後れ[illegible]學校に[illegible]たる無文の女子は早晩養育の任に當り構成の責に當らんとして教習の道なし國民教育の盛此れより急なるはなし予[illegible]自ら期する所ありて此等女子の爲めに人道實踐の道を講じ以て德器を成就し世間[illegible]の事理を曉らしめ以て家庭教育の任を盡くす家政整理の要を授け手工諸藝の技を習ひ以て[illegible]な　家族構成の責に當らしめ聊か國恩の万一に應せんと欲するの微衷發して得業女學校の開創となる願くは特に御憫察を垂られ直に御認可あらんとを茲に明治廿五年五月二日縣令第廿四條の規に準據し此段奉願候也

又地方廳を經由して文部大臣に出願したる女教員任命願は左の如し

女教員御任命願

女風漸然[illegible]を拂ふの時教育女子に普及せざるは浩歎の至に候因て民たるもの袖手高枕するの時に無之候間稲城不敏に候得共碎身之れを矯正振起致度宿志に有之候處今般女子得業學校設立の義本縣第五六六三號を以て許可相成候に付御直轄女子高等師範學校高等小學科卒業生（月俸十五圓以上）壹人本校首座教員に任用仕度候間右至急直に御許容被成下度然る上は出京致候て人撰及種々の御契約仕度此段奉願候也

●教員志望者詮考委員　大日本教育會にては教員小學教員聘用者及志願者の便利を計り同會事業の一端に教員紹介の一項を設け左の諸氏に教員志望者詮考委員を囑託したり

杉浦　重剛　色川　圀士　西村　貞　丹所　啓行　金子　喜治

●山梨の女子教育　女兒就學者少き原因は著名の機業即甲斐絹を織り出すこと最盛にして少女を機杼に從事し機聲戸として喧然たらざるはなく一市間（上野原猿橋、谷村、瑞穂等甲斐絹市場を開くをいふ）即ち五日にして多きは一圓五十錢少なきも一圓許の利益を一双の纖手に收むることを得るを以て七八歳の幼女にして早く已にくだなまきひきこみ（おさにたて絲を通す）等をなして母姉の助手たらしむるが故[illegible]假令赤貧ならざるも生計上の利益の爲に女兒をして就學せしめざるは[illegible]に疑ふべくもあらず

女兒[illegible]縫を必要視せず、さいはゞ其家庭の[illegible]なるを疑ふものもあらん然れども實際の習慣は[illegible]の結果を來すはまた已むを得ざるの勢なり夫れ新衣を裁縫するは稀に[illegible]にして機業は常に[illegible]る所なり常に[illegible]の業は入る所多く稀に裁縫する所の費（一多く人に托して裁縫せしむ）は少きを以て其多きを取て少きを捨つるは[illegible]ざるを得ざるなり「[illegible]はほころびを縫ひ破れを綴らば足る機業は能くせざれば結婚に妨げあり」とは[illegible]も之を目にし少女も之れを意とする者の如し其[illegible]業に[illegible]か中[illegible]小學に[illegible]視せしに業は「當村の男兒は文字を知らざるも可なりと雖も女兒には[illegible]だにも知らしめざるは不可なり」といひしには[illegible]せられしと聞く蓋し同村の男子は多く材木の採伐或は木炭を燒くが爲に[illegible]日深山に[illegible]して之を家に送る婦之を他に[illegible]りて一家の料理を挙るを以て[illegible]此に至るなり兩者[illegible]照せばまた好一對の[illegible]話なるべし

（山梨日々新聞十一月十六日）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●女子の受驗者多し　熊本市々役所に去る十一日まで受附けし小學教員檢定試驗志願者は都合十四名なりしがその中男子は僅か二名にて他十二名は女子なりと

●光學講義　後藤牧太君

來ル二月四日(第一日曜日)午後二時ヨリ凡ソ二時間本會講堂ニ於テ講義ヲ開ク右ハ專ラ學校教員ノ爲ニスルモノナレハ本會ノ會員ハ勿論會員外ト雖會員ノ誘引ニヨリ聽講隨意タルヘシ○爾後毎月一回第一日曜日ノ午後二時ヨリ開講凡ソ六回ニテ結了ス但聽講無料トス

東京神田一ッ橋通町二十一番地大日本教育會

◎美談

⊙婦人の好龜鑑　秋田市手形掘反町に目賀多信順氏と云ふあり氏元來米澤出生の士なるも今籍を秋田縣に移せり然るに去る十九年以來疾病に罹り今尚ほ癒へす常に保養の爲めとて公務(裁判所書記たり)の餘暇には自ら鍬を把り糞桶を荷ふて農事を事とせり自ら謂ふ人世の計り知るへからさるは尚ほ蜉蝣の生を托するに似たり況んや宦海風雲の常なき何時非免の汰沙を見るやも計られす此時に當り遽かに之か處分を考ふる樣にては遲し常に其用意なくては叶はぬ者と觀念し自分の實業を執るは固より家族共にも手仕事なりとも授けばやと考へ居る際恰もよし米澤同鄕の婦人にして先年大館町某方の機業場に雇はれ居たる宮嶋ぬい女となん呼へる婦人歸鄕の途次なりとて尋れ來たるを幸ひ教師に雇ひ機業を習はしめんと相談に及ひし處早速承諾を得客冬より事業を開くに至れりと云へりさて其事業の模樣如何にと云ふに素より營利的にて始めたるにもあらされは、最初より盛大にはなさぬとの事なるも、其織立の品物は何れも米澤風にて絹糸織なれは衣類、羽織、袴帶地、其他節織等實に立派なる上等品なり就ては去る人はこの業を營し當市の士族連にも傳授し呉れずやと問ひたるに目賀田氏は最も望む所なれは何人にても所望の人には傳授すへしと語りたる由我か秋田の氣運をも何さかして此邊に向けたきものなり尚ほぬい女か實業の巧絕固より純孝至性以て一般婦人の龜鑑となすへきは緣綬褒賞の寫にて明かなりとて態々本社に寄せられたるを以て左に掲く、嗚呼ぬい女の如きは眞に賞すへきの女丈夫なるかな

日本帝國褒章之記

山形縣羽前國南置賜直峯町　宮嶋ぬい

幼弱にして一家の多難に値遇し貧困にして兩親の長病を養護す衣簪を沽て以て藥餌に代へ紡織を勸めて以て湯浴に從ふ旣にして叔母又病み家兄遠く行る辛酸難苦謂ふべからさるに至るも毫も厭倦の色を見はさす志操の堅き十有九年一日の如し純孝至性洵に奇特とす依て明治十四年十二月七日勅定の綠綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

明治十九年五月二十四日

奉勅

賞勳局總裁從三位勳二等　伯爵　柳原前光

元老院議官兼賞勳局副總裁正四位勳二等子爵　大給恒

此證を勘査し第四十號を以て褒章簿册に登記す

賞勳局書記官從五位勳五等　平井希昌

賞勳局書記官從五位勳五等　横田香苗

山形縣羽前國置賜郡直峯町　宮嶋ぬい

純孝至性奇特に付綠綬褒章を授與し併て金拾圓下賜候事

明治十九年五月二十四日

同　上

同　上

(秋田時事新聞一月十三日)

●織物女生徒の龜鑑　福岡縣天神町柿楼染工場生徒竹尾トク女(二十年)は幼年の頃より織物修業の爲め同工場に入り日夜研究勸勉し且つ品行善良にして是迄數度の賞與を受けし身なるが今回普通織物は固より花紋模樣織上機シヤカートツカニツク及び染色術に至る迄普れく熟達し織物本科優等の卒業證書を受け且つ入學中格別勉勵の廉を以て織物機壹一組をも賞與せられし由なるが從來同工場に於て卒業したる生徒數十名中に斯く優等の成蹟を以て卒業したるは誠に稀れなりと云へり因に記す井上ヌイ女も亦た今回本科を卒業せしが是亦た成蹟大に宜しき由

●感心な女生徒　大和國式下郡唐古高等小學校は女生徒の爲め特に其敎科を可成的實用に近切ならしめ女生徒をして日々の學科を以て最其の樂みとなさしめんと種々教育上に注意する所あるより昨今女生徒の就學するもの追々增加する摸樣なるが中にも同第二學年の吉村ヒデ女(十二)は父親に早く死別れ母親の手に育てられ居るものなるが稽古ごとが心から好にて日々遠き路も厭はす風雨降雪の日と云へども一日も欠席せしことなく神妙に登校し一心に勉强する程ありて學業も大に進歩し教員等も大に望を屬し居りしに先頃より母親は家事の都合ありとてヒデが泣き入て賴む請も容れず退校なさしめたるに右同校々長等は大に惜み居りしがヒデ退校后と雖ども教科書を繙かぬ日とては一日もなく且夕母親に今一度就學さし呉れよと泪流して賴み聞ゆるゆへ母親も我子が斯くまで好學心のあるに感じ更らに此程より同校に再入學を申出で日々通學せしめしよりヒデ女は大に喜ひます〳〵勉强なし居る由實に感心の心掛けなる女生徒と云ふべし

(以上二件、大日本教育新聞)

●婦女鑑　壹岐武生水高等小學校裁縫科雇教員横田ケイ子は故海神々社宮司從七位横田實礎氏の未亡人なり氏は明治十七年肺患を以て一男二女を遺し當市爐楷町の寓舍に歿れしが當時ケイ子の齢僅に三十なりしにも拘らす悲痛哀惜の間に年を送る十年貞心操行能く力を遺兒の養育に盡し長女タカ子は旣に高等小學を卒業し長男次郎氏は平戶猶興館に次女ミサホ子は高等小學に各在學せしめつゝありと云ふ子の家敢て豐かなるに非す且つ寡婦の身を以てして能く今日を致せるもの蓋し

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

眞人の遺志を繼守したるにあるべしと雖も抑も亦子の徳行の高きに由らずんばあらず借問す天下幾多の夫人子に愧ぢざるもの果して幾許　（靜岡日報一月十二日）

◎片々

●即興復讐　麻布我善坊邊に山本梅仙となん呼ぶ人住みけり男女兩人の子を持ちて家も富裕なりければ男をば神田の某學校に通はせ女をばお茶水橋邊の某女學校に入學せしめぬ斯の女、名をお靜とか呼べども中々に快活なる性を持ち頗みに飲酒の人に害あるを悟りしかば何時の頃よりか婦人禁酒會員とぞなりける去ぬる日曜の日の事と聞ゆ靜子は放暇にて家に還りしに間もなく一人の書生、兄幾之丞を訪づれ來りて閑談の後、幾之丞のいふ久々にての面會なるに殊に新年の事なれば酒一つ進すべしとてその準備を勝手へ命じけるを靜子聞きていと本意なきことに思ひ自から庖廚に行きて酒などの用意無用に致せと命じければ家婢は兩主人の命の衝突せるに迷惑して如何取計ふべきやと主婦の裁斷を乞ひける主婦は固より靜子の禁酒説の意味を解せざれど世間の少年が身を誤るは常に此の飲酒の挨拶あればなりと信じつゝ日頃より幾之丞が酒好きなるを憂ひ思ふ折柄なれば家婢の訴を聞きて靜子の説に加擔せるものから賓客に對して無禮なればと簡申訳を取りて漸端酒を禁めさせける扨て來客歸りて後ち幾之丞は妹が差出口したるを聞き左ればこそ女に學問などさすべからずと日頃いひたるなれ生意氣のお轉婆もの、此の讐いつか復へさでや置くべきと口に言はねど心に深く刻み付けたり軈て又訪ひ來りしは靜子が學びの友にて近邊に住める某官人の令孃なり靜子は家婢を呼びて茶菓を命じ家婢は主婦の處に往きて其旨を通じけるに先刻より待ちに待ちたる幾之丞は盲龜の浮木、盂曇華の花咲春に逢ひたる心地、づかづかと母の前に出で菓子など滅多に饗し給ふな夫れ菓子の胃に害あるは酒の胃に害あるが如し、それも遠慮して手を出さぬ性質なれば知らざれど今の女學生の無遠慮さは仇喰ひして遂には胃弱の種を蒔く畏るべし愼しむべしと說く折しも靜子は茶菓の出でざるを氣にしつゝ居間に至れば斯くの仕合的面の讐打たれにけりと早くも察して一言もなし　（新朝野新聞一月廿日）

●佳吉村の婚禮風俗　花嫁と花聟とは誰も見たいが人情とて嫁入聟取に見物人の多きは何國も同樣なり、又たこれに就て種々の習慣ありて毎度奇談を耳にする所なるが那珂郡住吉村邊に於る新婚見物人の甚しきを聞に隨分厭はしき野蠻の風習あるが如し、今晩何某の方に嫁の來るとか聟の來るとか聞けば十三四才位ゐの子供は勿論十五六才から乃至廿二三才近位の男女が手を携さへて婚家の戸前または庭前などへひしひしと詰かけ今や婚儀の最中なるにも拘はらず大聲を發して新婦新夫の衣類の評ぶみをなし、彼位ゐの羽織は二圓五十錢なれば喜こんで賣る、李書紬のパサパサはお粗末なり、嫁子の帶は和繻子の下等一尺八錢なれば結構なり、色の黑い所へ濃化粧は嫩野の霜ぞ、何たる不細工な鼻だらう、口の廣いのが氣に適すなど、家内は靜肅を旨として人生第一の大儀式を行ふに見物人の嘲弄罵詈殆んど至らざるなし、甚しきに至りては新婦の棚卸しをなし新夫の不品行を吹聽し、普通家なとの聞えある婚嫁は此の夜を以て花嫁及び其の兩親一族の人々へ見物人より其の平生を高聲に訐かれるとあり、尤とも往昔と異なり當今は餘程風俗も矯正されたる方なれども尙ほ大いにあり、既に三四日前大字住吉なる何某氏の許へ夜須郡地方より嫁を迎えし所例の如く見物人集まり來て種々の惡言を放ち且つ其言葉の鄙さか與ひ居るを大いに笑ひしとかや實に言語同斷不體極まる所爲と謂ふべし、而して若し婚家に於て見物人の喋喃に立腹して門戸を鎖すか雨戸を締るかすれば外より砂を振り石を投じて容易ならざる騷ぎをなすとなり、是等風俗の矯正には有志家を待つに及ばす、父兄たらん人が些しく注意すれば夫にて事は足るべし、婚姻は人生の典なれば兒戲の事として放置すべきにあらずと博多の某氏より投書のまゝ　（福陵新報）

●婦人禁酒會創立　去十四日松田郡長私邸に水口有志者二十余名集合し同夫人より婦人禁酒會創立の事を協議したるに孰れも贊成して直に創立委員を撰擧せしに西村利一伏木八兵衞富田齋作山村讃治郎富田利三郎の五氏當撰し郡役所の課長綱谷北村の兩氏補助員となり規則書等の編纂に着手することに決定せりと云ふ　（近江日報）

●女子工藝獎勵會　青森縣工藤源司氏外數名が發起となり京橋區銀座通り三丁目二番地へ假事務所を設け女子工藝獎勵會なるものを設立し女子の工藝を奬勵する筈にて東京に本部を置き各地に支部を置く由

●忌むべき流行　冬期に向へば農家の子弟少暇を得るものから地方の飲食店其他に於て[illegible]姫の盛んになるは各年同じことにして氣候季節と關はりありといはんか新潟岐阜の地方殊に甚しといふ、慨かわしき次第といふべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

驚くべき日本の大發明

●りうまちす病新藥發見　病理學の進步に從ひ屢新藥の發明あるは我々人民貴重の生命をして長壽健躰に安居せしむる實に喜び限りなき聖代りうまちす病新藥其藥劑原品は墨西其國より輸入する藥劑にして發明者は有名なる大醫陸軍々醫總監林紀先生にして此藥劑を配合したる丸劑は屢痲質斯病を根治全快せしむる耳ならず瘡毒かつけ病等も忽ち全快せしむ發明以來此藥劑を用ひて全快せし患者五萬人以上に達したり　岡田商店
りうまちす瘡毒かつけ參病は皆長病でありますヌ難病でありますが此發明新藥は一二年位の輕症患者は半劑九日分にして全快す、五六年は一劑十六日分十年以上は二劑服すれば必らず全快す
此新藥は根治療法にして後患なき發明藥ゆへ殊に外國人の賞用するにより外人居留地に販賣店あり海外輸出店は朝鮮國京城泥廿號山口商店なり
藥名は克快丸といふ此發明新藥を購求しりうまちす瘡毒かつけの長病を根治全快せしめんとせば藥價の外送達料二錢を添へ郵便爲替にて東京市淺草區なみ木町大通り東側順天堂藥房岡田支店と認め御注文あらば急送す　岡田商店報
半劑金三十錢　壹劑金五十錢　貳劑箱入金壹圓之

日本の美婦人

●海軍大軍醫石神六郎先生の發明せられたる**天賞湯**は婦人ちの道子宮病に用を治し身躰をあたゝめちのめぐりをよくし子宮症其他婦人病源を全治するは此新藥天賞湯に限る又產前產後に又月やく不順に皆服用して全治せざるなし　ナチリ膏と云ふきず藥あります
痲袋七服入全國一般送料共金三十四錢　克快丸商店報

發明本店
東京市淺草區みな木町大通り東側
順天堂藥房　**岡田支店**

關西特約
大坂市北區堺屋町二丁目九十六番地邸
克快丸進支店　**津川音五郎**

克快丸取次賣弘所之部

東京市畧表

所在	氏名
兩國村松町特約	岩浪長藏
同廣小路米澤町	大木口哲
日本橋區上槇町	安川榮次郎
同小網町四丁目	百草軒藥林
同代三町ふじや	島田理兵衛
同瀬戸物町同	玉置金八
本石町二丁目	森谷萬治郎
同大傳馬町二街	岩浪出店
同馬喰町一丁目	平尾賛平
同同二丁目	岩浪支店
同元大坂町	高木清婦湯
下谷池之端寶丹	守田治兵衛
京橋銀座一丁目	佐々木商店
同銀座二丁目	岸田精錡水
同三丁目萬金丹	松澤八衞門
牛込築土八幡町	尾澤良助
四ッ谷傳馬町角	永田義原
神田仲町記臆丸	山崎帝國堂
辨慶橋東福田町	ふいごや
本郷五丁目山田屋	高島文藏
淺草菊屋橋角	山田清兵衛

横濱市畧表

所在	氏名
野毛町三丁目	栗原清八郎
同二丁目	杉浦藥舗
伊勢崎町二丁目	西海喜兵衛
同一丁目ひろ屋	櫻井久三郎
賑町一丁目	里見松泉堂
戸部町五丁目	室屋德藏
同一丁目上野屋	細野藤衞門
長者町六丁目	藤田孫七
元町二丁目藥舗	中村德次郎
同一丁目栗原屋	柿沼忠之助
同代官坂下角	竹生福太郎
同五丁目二天堂	田澤又衛門
石川仲町地藏坂	小林信治郎
石川町六丁目	田中熊治郎
同仲町六丁目	中井兼一郎
北方千代崎町	岡田誠之進

諸國の部畧表

所在	氏名
肥前濱崎橋口町	廣川常太郎
備後尾の道中濱	佐藤政兵衛
岩代飯坂町湯澤	白田養壽堂
北海道圓山村	伊東磯八
同苗穗村五番地	鈴村馬助
上總東金北幸谷	高山音次郎
遠江國掛塚港	加藤太一郎
野州栃木河合町	叶屋利平
豐後國臼杵町	本多妙藥堂
前橋市細ヶ澤町	西村兼治郎
武州秩父大宮町	永井安之助
上州高崎連雀町	鈴木彦三郎
上總木更津貝淵	小倉源藏
名古屋建忠寺前	佐藏市五郎
駿州沼津町大門	長倉範吾
陸前氣仙郡盛町	千葉市治
仙臺市大町三	慈善堂
尾州熱田はたや	栗田善次郎
下總海上郡旭町	近江屋吉藏
陸前石之巻横町	菊屋善次
弘前土手町	野崎藥店
陸中鍬ヶ崎上町	堀田文七
岩代須賀川東十	吉川淺吉
盛岡市紺屋町三	大島常次郎
甲府市泉町	父母の屋金藏
甲府市常盤町	內藤寳藥部
函館辨天町	國領平七
信州松本大橋詰	增田武壽計
同上諏訪上町	宮坂金三郎
同小諸市町	藪原勇
北佐久郡鹽名田	望月喜之助
淺間溫泉本郷村	手塚七太郎
南安曇郡穗高町	山屋浦吉
北佐久郡中佐都	荻原仙助
羽後酒田下內町	佐藤立志堂
同飽海郡市條村	阿部仁衞門
羽前東田川下山添	阿部德惠
上州太田町賀店	成田定三郎

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

毎月一回發兌

評論

第貳拾壹號

要目

岐阜縣治水大策
棟梁の德
吉田松陰を讀む
勇退高踏の辨
近頃ろ官吏となりし人
佳人と愛國者
人をして感動せしむ
新教育法
强者の權利の競爭を讀む
大日本協會に寄す
上毛廢娼史

評論定價表

東京市内		市外郵税共
一冊	六錢	六錢五厘
六冊	卅三錢	三十六錢
十二冊	六十錢	六十六錢

發賣所
東京市神田區表神保町六番地
文學雜誌社書店

御おしろいたし元祖

純良麝香入新發明ねぢ口輕便器物入なるを以て貴婦人に必要の品なり

貴婦人方ハ是非御弁利の品なり

ねぢ口みて奇妙の入れ物なり

東京馬喰町一丁目（電話六五二番）
有名賣藥化粧品類御問屋宮内省御用達
岳陽堂 平尾贊平

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

俳諧史傳

近刊

●小此木、布川兩氏の著『俳諧史傳』正さに出むとす。嘗て『城南評論』『評論』の紙上、多少の讀者をして其精細なる筆法に傾倒せしめたる兩三篇は、實に斯の書中の一部のみ。

●思ふに、俳諧は我文學史上に、一大特殊の光明を煥發し、三百年の間、庶民の美妙なる想念を漾蕩せしめ、豪宕なる漢詩、優婉なる和歌以外、別に、幽玄、閑寂、悲壯、沈痛なる詩天地に逍遙せり。

●俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞德となりて、諧謔を擅にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる壇林の花を咲かしめ、更に、詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、正風俳諧となり、平民的叙情短歌の面目を搆成す。

●其源流に遡り、其發達を訂ね、其推移を叙し、其變遷を記し、其特相を論じ、一讀の下、燦然として讀者の腦裡に斯の文學を活現せしむるものは、我『俳諧史傳』なり。

●これを分てば俳人個々の傳記となり、これを聯ぬれば、一篇整然たる文學史をなす。逸事ありて、以て興趣を横溢せしめ、名句ありて、以て一誦、天地の幽遠なる秘奥に冥合せしむるに足らむ。

●若しそれ、一字苟もせず、一筆輕々に下さず、言々證あり、句々據るところあり、而も文章、平易簡明、叙記、精到凱切なるや否やは、世の公論に一任せむのみ。世の俳諧を知らむとするの士、一本を座右に備へば、得るところ豈に鮮少ならむや。

●今や我社は斯の『俳諧史傳』の印刷に着手せり。讀者の机邊に現るゝは旬日の中にあらむ。敢て豫め公告すると爾かり。

發行所 東京神田表神保町六番地 **女學雜誌社書店**

文部省普通學務局學校衛生事項取調囑託醫學士三島通良先生著

學校衛生學

全壹冊洋裝背皮金文字入美本 正價金六拾錢 郵稅金八錢

三島醫學士か我國に於ける學校衛生學に就て、如何なる學術と功績とを有せらるゝかは、江湖既に定論あり。本書は實に學士か公命を以て四方を巡回し、今日の學校と生徒とを調査したる刻苦丹精に出て、殆ほ前任文部大臣一伯一子の勸誘に成る。其議論の斬新正確にして我國學校の實際に適合すへき事は論を俟たす、醫師、教育官吏、教師及ひ校舍建築工師は、必す一讀すへき寶典なり

文部省普通學務局學校衛生事項取調囑託醫學士三島通良先生著

救世 種痘學

全一冊洋裝 新版種痘手術圖解入

正價金二十五錢 郵稅二錢

種痘の世に鴻益あるは何人も知るところなれども、其何れか眞正の種痘法なるやに至りては之を識る者稀なり。是蓋し年々天然痘の流行する所以なり。本書は最新の學理と數年の實驗とにより、先生の著述せられしものにして、議論嶄新、例證正確、種痘學に於ける近年の良書なり。醫師は勿論衛生に關係ある吏員及ひ學校教師は必す一讀すへきものなり。

賣捌所 東京市神田區表神保町六番地 **女學雜誌社書店**

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

皇后陛下 明宮殿下 御覽濟の書

再版

巖本善治妻譯

小公子

（リツトル、ロード、フォントルロイ）

子供のよみ本

坪内雄藏君批評（早稻田文學第四號）

原書の精神は無邪氣なる小公子を主人に利己心のみ傾ける老貴族を副主公にして「無邪氣」の周圍に及ぼせる感化並に周圍の「無邪氣」に及ぼせる影響を寫さんと力めたるもの丶如し小說としての價値如何は譯者に就きて論ずべきにあらず只一言すべきは斯く純潔無垢の良小說を紹介したるは女學雜誌社平素の主義よりいふも誠に能く撰みたりと云べし譯文は誠に流暢平易なれど其中に譯者が深切なる苦心の跡見えたり就中長幼貴賤の言語を區別せんとて又は文體の調和をはからんとて「キツト」「大した」も「鼻が高い」「目がない」等の俗語を用ひたるが如きは殊に全力を注ぎたりと見えていとめでたし行文の中に餘り多く「御」の字を用ひたるが少しく耳だてて咎むべき點にはあらず「人にいひ〳〵しました」「しつかり歩いてゐました」なぞ言葉を重ねたるにおのづから優しき女敎師が幼童に敎ふる時の風に似たり何れも譯者の婦人たるを證してなか〳〵にゆかし」兎に角當今外國美文學輸入の必要あるに際し斯く原文の精神と外形とを寫し出さんと力めし翻譯の現はれしは文學のため賀すべき事なり。

正價金二拾八錢　郵税金八錢

櫻井明石君譯

希臘孝子 腓立比物語

大形洋綴美製　定價金卅五錢　郵税金六錢

今を距ること六十年希臘國の勇士等、土耳其國の壓制に堪へず義兵を擧げたりし時、一方の將となりたる、メサロスなるもの戰敗れて、其妻と共に奴隸に賣られて、遠くアラビヤのバグダッドへ連れ行れて、苦役に服しをり、其子腓立比其時六才なりしが、或人に養育せられて、十七才に至りたる時、土國より遣はされたる管領の危難を救ひしが緣となり、管領腓立比の至孝勇猛に感じて莫大の金を與へ、船を用意させて兩親を贖ひに出しやり、船中にて腓立比は船長の危難を二度助け、又船長の助言により腓立比基督信徒の身を以て、土國マホメット宗徒の假裝を爲して、單身にて隊商の群に加はり愈アラビヤの沙漠に乘り込み、沙漠中にて其基督敎徒なると露見し殆ど生命も危かりしを、隊商の頭領其至孝と堅信とに感じて、大に腓立比を惜みたるにより、後又隊商等がアラビヤのベドウイン族に掠奪せられ囚虜となりし時、腓立比も、亦囚人となり、爾後幾多の艱難經驗ありて、終に酋長腓立比の志に感じアラビヤの健兒に護送させてバグダッドへゆるし遣り、バグダッドにて非常の困難に遭ひ大失望したりしも、圖らぬ事を得て遂に兩親を奴隸苦役の中より十二年目に茅出度救ひ出しぬ。

發行所

東京神田表神保町六番地

女學雜誌社書店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

岡田起作先生書

かな習字帖

一册　正價金十二錢　郵稅金二錢

方今女子書躰の衰頽せるを憂ひ之を矯正せむとて新教授法を發明せられたる岡田先生が多年の經驗により極めて習ひ易き字躰もて徒然草の中修身に關する章を書せられたる習字帖にして高等小學第三第四年級より高等女學校第一第二年級の習字科に適當の者なり倚ほ引續き逐次優美なる習字帖を刊行せんとす抑も岡田先生は現に女子高等師範學校。高等女學校。東京府尋常中學校。明治女學校。女子文藝學舍。立教女學校。成立女學校。等より教授を囑托せられ各生徒進歩の著しきは皆人の稱道する所なり之に因りて教授の懇篤なると能書の名聲あるを知るに足れり今此習字帖世に出づ是によりて進まば奇僻に墮るの患なく優美なる域に進むの楷梯たらんとす

河村墨稼君書

十體千字文

千字文講義
實語敎俗解
童子敎俗解

全一册和裝　上等日本紙●印刷鮮明　正價拾五錢　郵稅金四錢

頃日臨池社會に一新面を出せる河村墨稼先生の十體千字文は則是也、開卷目を披けば、古なるもの、新なるもの、奇なるもの、正なるもの、書に似て文字なるもの、豪宕なるもの麗清なるもの、墨稼先生の神筆をかりて之を現す、加ふるに附錄として**千字文講義、實語教、童子教の俗解**ありて諸書百家の書を引證し、之に詳細なる解說を下し其書を學ぶもの、用に供するのみならず、又其意味の深遠なる所以を知らむ、眞に是萬能共に到るの良本也

。文部省檢定濟高等小學校教科用。
藤尾錄郎君著　田口卯吉君序

●實地應用家計簿記法

全　正價金二十錢　郵送料金四錢

此書ハ只朝夕數字ヲダニ記入セバ一家ノ出納細大漏サズ之ヲ明ニスルヲ得セシムルモノニシテ公私ノ學校生徒ハ固ヨリ官吏、會社員、農工商ニ論ナク凡ソ一家ヲ經營スル者ハ必ズ購讀スベキノ要書ナリ

。文部省檢定濟高等小學校教科用。
藤尾錄郎君著

●實地應用家庭簿記法例題

全　正價金十錢　郵送料金二錢

右ハ前書家計簿記ニ據リ記入法ヲ習學セントスル者ノ爲ニ例題ヲ設ケ其標準ヲ示シタルモノナリ

●日記帳　正價金六錢　郵稅二錢
●元仕帳　正價金六錢　郵稅二錢
●賄費拂帳　正價金十錢　郵稅四錢

但三册一トﾄ纒メニナス時ハ郵稅金六錢

右ハ前書家計簿記法ヲ實用ナサレ候方ハ勿論又同法例題ニヨリ簿記法ヲ習學ナサレ候女學生諸君其他一般ニ簿記ヲ習熟セラレントスル方々ノ御便利ノ爲メニ調製セシモノニシテ此三帳簿アレバ一家ノ經濟ヲ容易ニ整理シ得ベク若クハ容易ニ家計簿記法ヲ習熟スルコトヲ得ベキ極メテ重寶ナル帳簿ナリ

賣捌所

東京神田表神保町六番地

女學雜誌社書店

横山雅男君著

婚姻論

目次

第壹章　總論
第二章　婚姻の定則
第三章　婚姻は人類の天性
第四章　婚姻の効力
第五章　婚姻は社會の盛衰によりて増減す
第六章　早婚上
第七章　早婚中
第八章　早婚下
第九章　晩婚
第十章　私婚上
十一章　私婚下
十二章　血族婚上
十三章　血族婚下
十四章　濫婚上
十五章　濫婚下
十六章　離婚上
十七章　離婚中
十八章　離婚下
十九章　正婚
二十章　結婚年齢
廿一章　離婚年齢の差
廿二章　男女共諾法上
廿三章　男女共諾法中
廿四章　男女共諾法下
廿五章　男女互に撰ふ事
廿六章　離婚の境界
廿七章　離婚
廿八章　結論
目次終

洋綴中本　二百三十九頁
正價　金拾六錢
郵稅　金四錢

船越鼎太郎君著

産婦小兒 攝生法

目次

第壹章　月經
第貳章　姙娠したるを知る法
第三章　出産期日を知る法
第四章　姙娠中の攝生法
第五章　分娩期中の攝生法
第六章　産後の攝生法
第七章　初産兒の所置
第八章　哺乳期中の攝生法
第九章　生母の乳汁を用ひずして乳兒長育法

正價　金拾錢
郵稅金貳錢

鈴木弘恭大人講述

第五版 百人一首講義

（附錄小倉てびき）

御高評を得たる百人一首注文いよ〳〵多く第四版品切に成りたれば茲に第五版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて、百人一首それ〳〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すことを得る至極重寶なり。

正價　金廿八錢
郵稅　四錢

再版增補

鈴木弘恭大人著

文法口授　一名和文獨案内

（半紙判日本綴）

目錄

（一）文と云ものゝ譯
（二）章句段節の譯
（三）文を作るは容易なる譯
（四）多く文を作るを善とする譯
（五）文を作る工夫の事
（六）草稿の譯幷に書方
（七）文を練磨する事
（八）文を作るに病癖ある事
（九）佳篇を作る法
（十）文を培養する法
（十一）種々の文例

正價　金拾二錢
郵便稅　金二錢

發行所　文學雜誌社書店

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌社近刊書籍預告

ウイラード自叙傳

世界婦人禁酒會頭フランセス、ウイラード女史が、自から流麗の才筆を揮ひて、自己の生ひ立ち經歴を記したる自叙傳を、簡潔に、有益に譯述したる新書近刊せられんとす

淺瀬の波

第貳篇

池袋淸風大人選

山階宮殿下御題字
高崎正風君題歌
幸野楳嶺氏題畫
谷勤君序文
税所敦子序幷歌

池袋大人世の詠歌徒らに語格の桎梏に繋れて人工の作爲に流るゝを見て慷嘆し自ら抱負する所を以て後進を薰陶せらるゝや兹に多年常に天眞の活歌を目的となし天地間の情景を初心の思想の儘に言はしめ又後進の性質によりて之を開發し充分に自然の發達を計られつゝあり故に少年少女と雖も年ならずして立派なる秀詠をよみ出づるに至れる蓋し敎授法の宜しきを得たる所以也

第一篇は既に世に行はれ畏くも九重乙夜の覽に入りしを見ても其聲價の一斑を卜知す可し今やまた大人其の社中輓近五年間の詠歌無慮五萬首及び客員の秀詠等を　せて凡そ六萬首を精選し第二篇となして世に公にせられんとす剞劂其の功を竣はる亦近きに在り請ふ其日を待つて眞價を批判せよ

松村介石先生著

婦人のかゞみ

全壹冊美本
定價廿五錢
郵税四錢

本書は女生が一生の方向を尋ぬる緒論より筆を起し、美人論にて終ふ。論ずるところ廿有題。凡そ女學生とし、妻とし、母とし、敎師とし、記者とし、看護婦とし、獨身者とし、事業家として、學得修養すべき件々網羅して遺さず、要は婦人をして、萬界を通じて理想的たらしむるに在り。議論着々實際を穿つ。目下女界濛々霧深し、此書實に羅針盤たるべし。

目録　緒言〇女子の敎育●第一生前敎育●第二家庭敎育●第三學校敎育〇智育〇躰育〇德育附女子修德の心得(一)修德を好まぬ人(二)修德に意を留めぬ人(三)修德を力むる人(四)修德を樂しむ人●第四經驗敎育〇男女交際論〇撰夫論〇妻の務〇獨身論〇事業論〇姑媳論〇養子養女論〇婦人の大權〇惡例〇善例〇美人論

賣捌所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

基督教

樋口忠子著

一月廿五日發兌
正價郵送料共金四錢
郵劵代用諾す

此書素と樋口忠子氏唯少しく基督敎の主旨を某中學校學生諸氏に知らしめんが爲めに稿を成したるもの、故に靑年諸氏の爲めに謀るもの多し。頃日信天社主人故あり東都にあり此稿を二三の大家に示す、皆勸むるに之を世に公けにすることを以てす、乃ち訓諭に從ひ直ちに印刷に付し妄りに世に公けにす。若し夫れ其小冊子たるを笑ふなく其著者の婦人たるを蔑するなく靑年學生諸氏の一讀を得ば幸甚とす。

發兌所　大和國郡山町小川町　信天社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

福音新報

第百四十九號（一月十九日發行）

目次

福音新報 兩極端は合して一に歸す○加賀の千代と白樂天○離別に就ての雜感 **團欒** 基督の死を身に負ふ○乳（紫苑）○喫煙は悪習慣なり **說苑**（湯谷磋一郎）慈善事業と傳道 **外事** 倫敦の精神的、社會的必要○基督敎一致論○長老敎會各派の比較○卦音 **寄書** 佐久間象山と基督敎徒（信堂生）**敎報** 北海道釧路、札幌、仙臺、福島縣飯坂町、茨城縣久慈郡太田町、上州前橋、長野縣下諏訪、三河豐橋、越中、金澤、大坂北敎會、大坂、神戶、作州津山、紀州新宮、靜岡、福井、越前敦賀、靜岡縣大宮、武州和戶、福島、山形各地方通信○東京府下敎勢一斑 **新刊紹介** 婦人矯風會雜誌○女學雜誌

定價一部二錢五厘○十三部（三ヶ月分）卅一錢五厘○廿六部（半ヶ年分）六十錢○五十二部（一ヶ年分）一圓十四錢○府外每冊郵稅五厘

發行所 東京麴町區四番町四番地 **福音新報社**

賣捌所 東京神田表神保町六番地 **女學雜誌社書店**

共勵雜誌

第五號（一月十五日發兌）

目次●論說○新春に於ける吾人の覺悟○全世界共勵會（博士クラーク）○牧師傳道師と敎會（柏木義圓）●共勵談○我等如何せば共勵會を一層有益ならしめ得べきか（ブラッドショウ）○聖別會の意義（デッキンソン）○交際委員に與ふる書（エス、アイ）●雜錄○會員への勸告○片々○二種の改革家●內國通信●海外彙報●雜件●附錄○日本全國共勵會員一覽表

定價金一冊金四錢一ヶ年四十二錢

發行所 東京麴町區中六番町十番地 **共勵雜誌社**

女學雜誌定價表

冊數	定價前金	市外定價郵稅共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊（半ヶ年分）	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊（一ヶ年分）	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

一本誌購讀者は代價郵稅共凡て前金御拂込之事前金御拂込無之御注文有之候共一切送附不仕候

一本誌代價郵稅共郵便小爲替にて拂渡局を必らす

一ッ橋郵便爲替取扱所へ宛御振込の事。

請取人は神田表神保町六番地女學雜誌社と御記入の事。郵便切手代用は一割增（五厘切手に限る）にて申受け候。

一本誌御注文の節は住所姓名を明瞭に記載し號數は何號より何冊分と詳細に御書添への事。

東京市神田區表神保町六番地

發賣所 **女學雜誌社書店**

明治廿六年四月廿五日內務省許可
明治廿七年一月廿六日印刷
明治廿七年一月廿七日發行

發行兼編輯者 東京市麴町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 仝 牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地 根岸高光
發行所 東京北豐島郡王子村下十條八百五十一番地 女學雜誌社
印刷所 仝 牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍工塲（電話十九番）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

VASON
Feb. 1894
no. 365

明治十八年初刊

女學雜誌

毎週土曜日發兌

第三百六十五號

要目

病める母と二歳の小悴　若松しづ子

吁、かの瘋癲者

チックス女史言行録を讀む

一　水師提督ペルリの妹

二　日本瘋癲病院の創立者

三　清濁二様の氣稟

友なし猿　みむろのや

明治二十七年二月三日發兌

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

O
LINC

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY